謹賀新年

平成4年元旦

小松同窓会会報

第3号

発行

小松同窓会本部

〒923 小松市丸内町二ノ丸15

石川県立小松高等学校内

編集人 宮崎 榮

石川国体と小松高校

二巡目の第46回石川国体は夏季、秋季の全種目を県内の全市町村に分散して開催された。

小松高校も会場になり、先生は役員に、生徒は補助員にと大いに頑張った。会場としてはラグビーフットボールの成年男子の試合が本校グラウンドで行われた。その為にはグラウンドが堅すぎてタックルで怪我をしては大変と一度打ち起こしてやわらかくし、大会終了後にもう一度固めて復元するという大騒動をした。また体操の練習会場として、第一・第二体育館が使用され色とりどりのユニフォームの選手達でにぎわった。

生徒達は補助員として多数参加した。カヌーに58名、ラグビーに36名など約二百名がそれぞれの競技運営のお手伝いに連日汗を流した。そして総合開閉会式にはブラスバンド部員21名、音楽部が合唱に21名参加した。たびたびの合同練習など長い間の練習に頑張ったお陰で、準備してもらったオーボエ、クラリネットなど15点もの高価な楽器がそのまま今後も使えることになり、部員一同大喜びしている。

先生方はそれぞれの部活動の顧問をしている種目を中心に夏季6名、秋季26名と約半数が役員に従事した。それぞれの競技会場で殆んど泊り込みで審判などの任務に当った。

何と言っても大変だったのは選手諸君である。強化選手として地元の期待を担って強化合宿をくり返して来た。生徒はボート部6名、カヌー部3名、バレー部1名が参加し活躍した。

漕艇では源田さんが見事に優勝した。長い伝統の中でもどうしてもできなかった全国制覇を地元で成し遂げてくれた。カヌーでは斉藤・小丸君が2位、大音師君が6位とこれ又見事全員入賞の栄を勝ち取った。職員でも橋本先生が昨年に続けて漕艇で2位に入賞した。その他OBでもボート部11名、ハンドボール部5名など多数が出場し、天皇杯獲得の一翼を担ったようである。

学校は二学期を三日間繰り上げて始め、国体期間に三日間の休日を取ってみんなで半世紀に一度の石川国体を大いに盛り上げて頑張った。

ラグビー会場

優勝した源田選手

富山小松同窓会の誕生

支部長　原谷　敬吾

富山に住みついてもう50年を越えましたが、小松に近いせいもあってか同窓会支部をという動きはこれまで全くありませんでした。そんな中でしたが、この春頃から牧野（中学37回）、古田（高校9回）、中（高校10回）らの諸君が熱心に奔走され、去る11月16日、芽出度く設立総会を開くことが出来ました。

初めてのことでもあり、また取り急いだ呼びかけだったこともあって、当日は県内在住二百名の内52名の出席でしたが、小松から仲井同窓会長、井口校長のご両氏が駆けつけていただき、集いはいやが上にも盛り上がり、賑やかな談笑の中で楽しい秋の一夜を過ごしました。

高校時代からその道で名を知られ、先年の「ソウルオリンピック」に続いて、いま来年の「バルセロナ」を目差して頑張っている「ボート」の坂田昌弘君（高校33回）も出席されていて、会場には激励の声が大きく響きました。

会場は富山で一といわれる料亭「海老亭」でしたが、女将の村満智子さんには同窓（県女34回）の誼みでいろ〳〵とご配慮をいただきました。

生れたばかりの「富山小松同窓会」ですが、これからも県内同窓の諸氏と更につながりを深め、本部のご支援を得ながら、大きく育てゝゆき度いと念じております。

（中学26回）

講演

世界の中の日本

東洋エンジニアリング代表取締役専務
三島和夫

私は戦時中この学校で学び昭和22年に卒業しました。久しぶりに母校を訪れて、校舎が立派になり、生徒数も増え一人もいなかった女生徒が半数近くいるのを見て驚きました。

さて、今日は「世界の中の日本」という題で話をする訳ですが、国が変わると様子も違います。例えば、氏名の言い方がそうです。アジア系の国々は、多くが姓→名の順に自分の名を言いますが、欧米系では主に名→姓の順です。ところが日本人は欧米の人々に名を言う時は名→姓にわざわざひっくり返して言います。これは日本人だけに見られる特徴です。

ではなぜ日本だけがこのようなことをするのでしょうか。これは、鹿鳴館時代の影響と考えられています。欧米の文化を、何でも善しとしてまねをしようとしたその名残りがあるのです。

国が違えば、言葉を始めとして風俗習慣が違う－これは誰にでも分かり易いことです。が、案外見落し易いのは、〝もののうけ止め方が違う〟ということです。

例えば、太陽の色。日本人は〝赤〟と思っています。子供達に絵を描かせると、たいてい赤くぬります。ところが欧米では、太陽は〝黄色〟だと思われています。ベルギー人の知人にその話をしたら、彼女はそれを聞いて初めて日の丸の意味が分かったと言っていました。案外、日の丸の意味を知ってくれている人は少ないのです。

そこで他の国々の国旗を注意して見てみると、確かに黄色い丸の描かれた旗がいくつかあります。また、アジアのいくつかの国々では、太陽は白く描かれています。

このようなもののうけとめ方の違いを認識のギャップといいます。言葉のような、目に見える違いには気付いていても、この認識のギャップに気付いている人は案外少ないのです。そこから誤解が生じます。

しかし、自分の感じ方を変えて相手に合わせろというのではありません。自分の感じ方はそれとしてしっかり持っていればよいのです。ただし、隣の人々は違う感じ方をする、ということを知っていなければならないのです。皆が同じ感じ方、考え方をするのではない、ということを肝に銘じておくことが大切なのです。

国民性の違いをおもしろおかしく取り上げた話は多くあります。それぞれの国の広く一般的な性格をとらえてそれを誇張して言うのはおもしろいものです。しかし、ステレオタイプに何々人はこうだ、というのはなかなか難しいものですし、何より、とても危険なことなのです。

それぞれの国の生活様式には、その裏に何らかの示唆があります。表面的な様式の違いをおもしろがるだけではなく、その示唆の存在にも気付いてもらいたいものです。

例えば、中部ヨーロッパの街はたいへん清潔です。これは、住民たちがきれい好きというだけではなく、理由があるのです。中世にヨーロッパ全域で幾度かペストが大流行しました。この恐ろしいペストをくい止めるため街を清潔に保つ風習ができ上がったのです。

南欧の街では、建物は丘の上にあります。水の出が悪く不便であるにもかかわらず、人々は丘の上で暮らしています。これには、神のいる天に少しでも近付きたいという信仰心から、という説がありますが、これは間違いです。実はマラリアから身を守るためというのが正しい理由のようです。マラリアの媒介である蚊は、ある程度の高地では飛べないため、人々は蚊の来ない丘の上へと住みかを移して行ったのです。

こういった疫病対策は試行錯誤を重ねて行われて来ていますから、中には間違ったものもあり、それは例えば迷信として今に残っています。

以上の例からも分かるように、それぞれの国はいろんな試行錯誤、いろんな過程を経て現在あるのです。現在の姿には、それなりの理由が必ずあるのです。明治以降の日本のように短期間で大きく変化する国もあれば、長い時間かけてゆっくりと変化する国もあります。

現在、世界には約170～180の国々があります。それは大きく3つに分類されます。まずソ連などのような複合民族国家。次に、民族国家。世界の国々の約8割がこれです。そして朝鮮、ベトナムのような分断国家です。現在、民族国家のわくを取り払うのはまだまだ難しいでしょうし、おそらく今後も民族国家が主流となるでしょう。

では、民族とは何か、民族を規定する最大の要素は言語と言えるでしょう。現在、世界に約3千の言語があるといわれています。

日本が国際化するにあたっての重要な鍵が〝言葉〟といえるでしょう。具体的には、英語です。国際語としての英語の地位は、幸か不幸かますます固まりつつあります。衣食住の違いは見よう見まねで何とかなりますが、英語ということになると日本人の苦手なところではないかと思います。この言葉の壁がなくなれば、日本の国際化は飛躍的に進むだろうと思います。

（紹介　中学45回卒、四高、東大から通産省に入る。イタリア、ベルギー各大使館に勤務、中国地区通産局長、国際エネルギー機関局長、JETRO理事を歴任し、欧米5ケ国語堪能な国際人として活躍中。本文は平成3年10月2日小松高校創立記念日に講演されたものゝ要旨である）

小松中学春辺会

石堂　清倫

大正五年卒業の原谷一郎さんたちが精神の向上を期して創立された春辺会に、その六年あとに入学した私が入会した。入れちがいに卒業して高校生になった万仲余所治と中沢直吉のお二人が、よく後輩の面倒を見て下さった。会は安宅や小塩で臨海生活を組織したが、そうした機会に、トルストイ、ホイットマン、有島武郎、暁烏敏その他の人びとのことを私たちは夢中になって吸収したような気がする。啓蒙思想や改革主義や、何もかもが押しよせてきた大正デモクラシーの頂点だったのだろうと思う。天守台のうえで私たちは人生の理想について語りあった。

春辺会はスポーツにも熱心であった。安宅の水泳は、東大水泳部員の円地与四松さんが主任、五高の万仲さんが助者であった。五年生の中谷宇吉郎さんと一年の私がともに金槌組だったが、それでも最後は遠泳に合格した。

春辺会はボート・チームをつくっていた。各学年混成のため、何回も出漕したがいつもビリに終った。毎日授業が終ると桑畑を通って艇庫に駆けつけた。中村速見先生が時間割をつくられた。最後の組が手入れを終えるのは夕暮れをすぎるのであったが、先生はいつもそれまで待っておられ、鍵をかけて私たちと一緒に帰られる姿が思い出される。散歩というか遠足というか、よく三湖台に行った。二年のときは白山登山に加わった。このときの同行者中生き残りは一年の勝木保次さんただ一人になった。この年になっても、もう一度白山の姿に接したい思いがある。（中学19回）

懐旧

大島　清蔵

〝おれは川原の枯れすすき
おなじお前も枯れすすき
どうせ二人はこの世では
花の咲かない枯れすすき〟

厚歯の足駄の音軽く黒繻子の風呂敷に包んだ教科書を脇に、弁当さげ胸を張って前を行く先輩の後に、新入の三人が袴ばき（制服は六月から）肩から洋カバンをかけて、早朝の田舎道をカランコロンといそぐ。長田から松並木の国道に入る。寺井方面からの徒歩・自転車通学の連中と挨拶を交し合いながら茶屋町へ。それぞれ知りあいの家で靴ばき・ゲートルをつけて登校する。校門をくぐると畠山先生の服装点検、ホッとしながら楽しい学習生活に入ったものである。

福岡・荒屋校出身者で暁星会という同好グループをつくり交際を密にすることができた。文集づくりに夜通し謄写印刷をしたこと、放課後いそいで帰り校庭でテニスに興じたものである。おかげで校内庭球大会で優勝し庭球部へ入部したのが三年の春、卒業まで部員として汗を流したものである。枝ぶりのよい赤松を左に門をくぐると天守台への道が開け、左手は百メートルコースで、その左側は桑の木が少々生えた傾斜面、冬期通学列車待ちにスキー練習を楽しんだこと、天守台でつかまえた青大将が春光の空高く舞いながら飛びかった昼休みも忘れえない思い出である。

（中学24回）

学校だより

◆今年も9月12～14日の3日間で創立記念祭が行われた。全校生徒を四団に分けてベニア板18枚の大パネルをマスコットに、競技、アトラクション（野外劇）、マスコット、応援の分野で青春の覇を競う体育祭は、もう20年以上も続き、小松の伝統と名物の一つになったようだ。

文化祭も一日は文化系各部の発表等格調高く、一日は数年前からバザーも取り入れて、この日ばかりは学舎もにぎやかなお祭りの場となった。

◆夏休み中1年生普通科は全員で高山へ研修旅行に出かけた。一泊のミニ修学旅行と言ったところ。1年生理数科は能登半島へ野外実習に、内浦町に2泊し生物と地学をみっちり野外授業した。

◆10月の19号台風の被害は学校でも大変だった。

前庭のイロハカエデ、コウヤマキ、天守台横の大松など沢山の樹が根こそぎ倒れた。校長・教頭も頑張って引き起こすやら、業者にお願いするやら大騒動だったが、何とか復旧した。

◆今年は天守台の桜の老木に蜂が住みつき話題になった。天守台が蓮田の真中だった頃は問題にもならなかったろうが、今はもう天守台も運動場もすっかり民家に囲まれて天守台下は小学生の通学路になっているから蜂の巣も恐い存在になった。春に道へせり出した桜の老木の樹洞に蜜蜂が巣を作ったらしく、幹の小さな穴から引っ切りなしに蜂が出入りし苦情が持ちこまれた。可愛そうな蜜蜂のために本校の事務員が〝みなし子ハッチ〟の本を手に、害の無いことを付近の人達に説得して歩き、共存で見守ることで解決した。

ところが秋になって、この巣がスズメバチに乗っ取られてしまった。すごい羽音を立てて飛ぶ四・五センチもある蜂は見すごせず、かと言って自分達で退治もむずかしく、ついに専門家のお出ましを願うことになってしまった。

記念祭

亡き友

松永　昭陽

ここ数年来毎年小学校時代の友数人と旅行することにしているが、昨年7月には沖縄を旅した。その最後の行程で沖縄本島の南端沖縄戦の激戦地摩文仁の丘を訪れたが、そこには牛島軍司令官自決の跡や全国都道府県別出身者の追悼碑がある。その中に石川県出身者の「黒百合の塔」と978人の戦没者名を刻んだ石碑とがある。その中の「K・Y」と刻まれている所に目が止った時、思わず息をのみ胸に熱いものがこみ上げてくるのを禁じ得なかった。

彼K・Y君は、小松中学3年生の途中志願して海軍航空隊に入り、昭和20年6月沖縄戦終結の僅か数日前、特攻隊員として18歳の余りにも短い人生を終えた。いかつい身体、頬骨の張った、そして目くぼのやや落ち込んだ底に光る柔和な眼差し。彼の相貌が瞬間私の頭をよぎった。

昭和15年春に入学し、昭和20年春に卒業した私たち中学42回生は、私たちの前後10余年の期の人たちと同様に戦争の影響を色濃く受けた。多くの友は或は途中から陸海軍を志願し、或は4年修了と共に上級学校に進み、20年3月勤労動員先の愛知県刈谷市の工場で行われた卒業式には、入学時に約100名いた同期生はその時30数名であった。卒業式が学校外で行われたのはその他にはないとのことである。とかく暗いイメージの強い時期ではあったが、それなりに凝縮されたいろいろの想い出がある。同期生中戦争で直接亡くなったのはもう1人やはり海軍航空隊で訓練中殉職したY・T君の2人だけであったが、若き命を散らして逝った亡き友のことは常に憶念していかねばならぬ。

その日、摩文仁の丘の南にひろがる夏の海はあくまでも青く空は澄みわたっていた。最近とみに頭に白霜を増していくこの身ではあるが、わが胸中に蘇える亡き友の面影はあくまでも若く、そしてその目はこの上もなくやさしかった。

（中学42回）

健康スポーツ

勝木　道夫

過日、北国新聞夕刊随想で本会報編集長宮崎榮さんの「生涯スポーツ」を拝読、ご夫婦揃って体力づくりにいそしんでいらっしゃるご様子に大変感銘を受けました。

文明の発達が日常生活の中での身体活動の必要性を減少させ、これが体力の低下をもたらし、ひいては成人病の引き金になっている昨今です。

「長生きしているが健康でない」という現象を打ち破るためには、日々運動不足を解消して体力を高めることが必須条件だと思います。

運動はやり方が少なければ効果がなく、やり過ぎれば害が出ます。個々の性、年齢、体力、技術などに見合った個別的な強度、時間、頻度で無理なく、楽しみながら、継続して実行することが大切です。

21世紀を力強く生き抜く為に是非共必要な能力である、この生涯スポーツ実践力を身につける為には、今のように一種目のスポーツに専念するのでなく、学生の間に幾つかの種目をクラブ活動を通して経験したいものです。

事実アメリカでは学校スポーツはあくまで人生を幸わせに生き抜く為の教育の一手段であって、プロスポーツの予備軍養成であったり、過度の練習の為身体の特定の部位に反復して負担がかかって障害が生ずることのないよう、生長期には日本の甲子園大会のような全米規模の大会は開催されず、又1種目一筋ではなく少なくとも3種目のクラブ経験が当り前となっています。

スポーツに体力科学や心理学の研究成果を持ち込めば、スポーツ障害の生じない範囲の短時間の練習で戦果を挙げることも、大切な生涯スポーツの認識を得ることも、健康を増進することも、科学する心や物事に科学的考察で対処する力を養うことも可能になります。

ところで同窓会の皆様、あなたも宮崎先輩のように健康スポーツをお始めになりませんか。

（中学47回）

姉妹都市を訪ねて

橋　喜久重

9月16日、小松市役所前よりバスで20名がイギリスへ向けて出発しました。それは小松市とゲイツヘッド市が姉妹提携した記念の親善訪問の使節団で、木下教育長を団長に議員・華道・茶道・陶芸の代表、市職員、小松製作所代表で編成され、私は華道の部の一員としての参加でした。向こうの様子がわからないのと何よりも心配なのは言葉の問題で英会話の出来ない私にとっては大冒険でしたが、いろいろ気を揉んでいるのも出発までのこと、一旦機上の人となってしまったら、楽しさ一ぱいで修学旅行のような気分で一夜を明かしました。

ゲイツヘッド市は小松市とよく似た静かでゆったりした田舎町という感じでしたが、趣は全くちがい古い小さなレンガ造りの家並はまさにヨーロッパそのものでした。

毎日のスケジュールは昼も夜もびっしりでホテルに着くとすぐ着替えをして、パーティにデモンストレーションにとゆっくり休むひまなく引っ張

りまわされたという感じでした。しかし向こうの方々は大変親切で何かにつけ、さりげなく鮮やかにエスコートして下さるので本当に気分よく過しました。

華道の部では種類の少ない材料で何ばいも生けたり、同じパターンの材料で同じ場所で何ばいも生けたりで大変苦労しました。でも向こうのインターナショナル生け花グループのヒヤミ女史や小松製作所員夫人のアンさんが毎日来て説明したりお世話をしてくださいました。和服姿で生け花をする日本人は珍しいと見えて大変な盛況でどこへ行っても熱心に見学してくれました。またアンさんが和服について説明されるのでどんどん質問が出たり、傍まで近づいて来てしまいには帯を解いて見せて欲しいと要求されたりして面くらったこともありました。

ゲイツヘッドは昔炭坑の町だったそうでその跡を残して野外博物館とし古い商店街なども昔のままに再現してあり、二階バスや電車が走って居り、また夜はイルミネーションの町を見学に行きましたが、大きな町全体が様々なイルミネーションにつつまれ夏中のお祭りなのだそうです。今年はジャパンフェスティバルもあって日本の角力・柔道・ゲイシャガールなど次々と移りゆく様はまさにメルヘンの世界でした。また古典バレーも見せてもらいました。何だか古くさい場末の劇場のような感じでしたが、大学の中にあるのだと聞いておどろきました。白

短歌

樹下の木椅子

大杉幸子（県女25回）

糸すすきわれに賜ふと一束の
高原の風連れて訪ひ来る

かねたたき鳴き熄みにけり霧
そそぐわが庭草に入りて眠れよ

葡萄辛ロブルゴーニュ野にみのらせて樹下の木椅子にぶだう守老ゆ

鳥の湖はとても素晴らしいものでした。このバレーも月に一週間だけで毎月テーマが変わるそうです。次の夜はまたインターナショナルの方達との交流など忙しい中にも楽しい毎日が、アッという間に過ぎてしまい、一週間でしたがとても長かったような短かったような気持ちでした。

今回の外遊で特に思ったことは日本人は豊かな生活をしているということでした。私達は恵まれた毎日を有意義に過ごさなくてはならないと、心を新たにして来ました。外国に行ってつくづく日本の有難さを感じました。

（県女28回）

正月の朝

井上富貴子

元旦の朝、二階で孫たちのかん高い声が一しきりしたあと、その声がそのまま階段を降りて来た。母に連れられ私の部屋に入るなり、二人の孫は口ぐちに大きな声を張り上げて「おばあちゃん、おめでとうございます」と叫ぶ。

「はい、あけましておめでとうございます。二人ともに上手にごあいさつできましたね」孫たちにあいさつを返した。先ほどの、二階の声は母親に教えられてごあいさつの練習だったようです。

孫たちが部屋から出たあと、何といい正月かと、一人幸をかみしめながら年賀状を繰る。受刑中の人からの賀状は胸が痛む。また担当していた時はどうなることかと心を痛めた人が世帯をもち、子どもの名前を並べて書かれているのを見ると、ほっとする。

急逝した夫から私にプレゼントされた時間を自分だけのために使うのは、あまりにも勿体ないと思っていた頃、保護司をたのまれ、不安一杯で引き受け八年。私なりに不幸な少年たちに関われて来たのも、私を支えてくれる家族のおかげと感謝して、私の担当する少年たちの幸多かれと願わずには居られない私です。

（県女33回）

私たちの青春

大田寿美江

県女37回生もとうとう還暦を迎えることとなりました。月日の立つのは本当に早いものです。

小松同窓会の会報の原稿を書くに当り、学校時代の思い出はと、過去をたぐるのですが、楽しかったことは思い出せません。たゞ脳裡に焼きつくように残っているのは、戦争の思い出ばかりです。

戦災にこそあってはいないけど、この思い出を吐いてしまわない限り、私たちの戦争は終わらないのかもしれませんが、上級生は工場へ勤労動員私達は、教室を作業場として軍服の縫製作業で、戦争に参加しました。私は第一被服室で動力ミシンのジャージャーという音が今でも耳に残っています。指を一緒に縫って、針のさゝったまま、血だらけで泣きながら病院へ走る人も何人かいました。昼休は校庭でみんなボーッとしていたものでした。あの頃一体何を考えていたのでしょうか。「欲しがりません勝つまでは」の精神でじっと耐えていたのかもしれません。通信簿の採点も、縫製、鉛づけ、これが私達の青春でした。そして終戦、男女共学の施行で初めて小松中学の校門をくゞりました。自治会だったのかその記憶も定かでない程、何にもかもが、百八十度変化した時代でした。しかし反面、こんな戦中戦後を生きたからこそ逆境につよく、社会の変化に対応できる人間性を培うことも出来ました。でももう戦争はイヤです。親が子を案づるような世の中ではなく、子に思いをたくせるような安心できる世の中であって欲しいと祈りにも似た気持ちです。現在は自分の体

を気使い誰れかのために、お役に立ちたいと願う毎日です。

同窓会も「みなづき会」と名づけました。二年に一度ですが、御参加いたゞき、旧交を暖めたいと思っております。

（県女37回）

俳句

冬島遊泳

吉田悦子（県女33回生）

浮寝鳥乗せたる波の透き徹る

日の浸り眩しき鴨となりにけり

百の鴨百の水脈引き陣移す

私と謡曲

湊　道子

謡曲と言えば私が物心ついた時分から耳にしていたように思います。何故かというと私の実家のお隣が小原さんと言うお謡の先生のお宅だったので、毎晩のようにお弟子さんに教えていらっしゃる声が聞えて来たのです。ですから主人の謡の会について行って習い度いと思ったのも、習い出してからもすんなりと入って行けたのも、幼い頃から耳にしていたお蔭だと有難く思って居ります。

この道に入ってからは麦谷万次郎先生という立派な先生に恵まれていつの間にか三十年経ってしまいました。

その間金沢の能楽堂でお能を舞わせていただいたのも数回になります。

能楽堂と言えば金沢の能楽堂ほど音の良い舞台はないと思います。二三他県の舞台も踏みましたが何のわざでしょうか、舞台の下には大きな瓶が十箇余り埋めてある相です。舞によって百近い足拍子のあるものもあるのです。その沢山の拍子を踏んでいる時の気持ち良さ、舞台の響きに酔う心地です。

『六ツ拍子踏めば響かふ笛の音に吾が魂をのせて舞ひゆく』

『扇かざして九十二の拍子踏み進む板の響きと胸の鼓動と』

今の私にとって能楽は大きな生甲斐です。この大切な生甲斐に導き入れて呉れた主人も昭和五十一年夏三ケ月の入院であっけなく黄泉の国へ行ってしまいました。

能を舞う私の張れ舞台を観ていろ〳〵批評してほしいと、どんなに思ったことでしょう。

『咳込めば声かけ呉るる夫ありき今宵は独り湯を飲みて寝る』

『夫あればこの晴舞台観て欲しと遺影に供ふ形見の扇』

（市女12回）

旅の雑感

村田千鶴子

退職者の研修旅行で日本仏教発祥の地比叡山に参詣しました。

『二百の谷々を埋め、三百の神輿を埋め、三千の悪僧を埋めて、猶余りある葉裏に三藐三菩提の仏達を埋め尽くして、森森と半空に聳ゆるは、伝教大師以来の杉である。』

夏目漱石の名作「虞美人草」にはこのように形容されていますが、延暦寺には初めての私にとっては、神秘的な杉木立に囲まれた広い境内と壮大な根本中堂等々、目をみはるものばかりでした。

最後に阿弥陀堂に参詣する。そこでお坊様から法話を聞かせていただく。その方は頭上に御仏の小さな像（三、四cm位）がのせられているようでしたが、見方によっては、こぶのようでもありました。

次のように話されました。

「比叡山の古い法燈を守るために、社会の変革に棹さす、かたくなな厳しい生活が今もなお残っています。それは、好行相という行をしなければならないのです。日夜一仏一礼拝を続け、うつつの中に仏の姿を見るまでやめないという鬼気の感じられる人間ばなれした行であって寝ることも許されず、わずかに腰かけてまどろみ、歩きながら眠るだけで終日立ったり坐ったりして百日間の行をするのです。合掌している手も赤くはれてきます。冬は猪が出没するという山道。切り立つ断崖を迂回したり、交叉する木の繁茂する小道をくぐったりするという難行苦行の荒行をするのです。……」

心に沁み入るように話される厳粛な顔つきと、幾重にも謙虚な姿に感服しました。

法話が終わって、一瞬、静寂さの続く中で、

「失礼ですが、あなた様の頭上のものは御仏様を頂いておられるのですか。」と、おごそかに質問されますと。

「これは、私の体の一部です。苦しい修行のあとに現われたものです。」と……

一同、心の底から感嘆の声がもれ、合掌せずにはおられぬ祈りの尊さを感じさせられました。

阿弥陀堂をあとにしながらさすがに千二百余年の昔、伝教大師による祈りの歴史が、ひしひしと感じられると共に、僧兵の華々しい活躍の舞台でもあったことを、ひそかに思い起こしつゝ、この国の歴史と風光の豊かさを再認識させていただきました。

（市女17回）

ビスターリ

瀬川　幸三

大気中の酸素が標高4千メートルで60、5千で50％になるといわれます。このように空気がうすくなると高山病にかかります。私も、頭痛、便秘、下痢、睡眠不足、食欲不振、嘔吐、それに呼吸がしにくくなるチェーンストーク等いろいろ経験しました。運が悪いと死をまねきます。それに寒さもくわわるのです。

このような悪条件の中で登山を続ける際のこころがけは〝ビスターリ〟でしょう。ビ

スターリとは、ネパール語でゆっくり、あわてずというぐらいの意味をもつ言葉です。

私達の日頃の登山は、高校生を指導している立場のせいか計画通りの日程で、できるだけ早朝に出発というパターンですが、約一カ月、ヒマラヤ街道でシェルパ（ガイド）やポーター（荷運び）と生活するうちに、私達のやり方が通用しないことがわかってきました。そこでは、きびしい自然条件に、さらに予期せぬことが起きるのです。私達の遠征の時も20年ぶりの降雪にみまわれ、予定が大幅に狂ってしまいました。しかし、彼等は、決して急がず、ゆうゆうとしているのです。彼等は、自然のきびしさを肌で感じ、経験で、それにさからうことのむなしさを知っているのでしょう。

高度に工業化が進んだ社会に住む私達は、自然にたいして挑戦的態度、時には、傲慢な態度をとりがちになりますが、ヒマラヤ街道の人々のビスターリな生き方は、いかがでしょうか。（高校10回）

ニューメディア

杉永　靖夫

平成3年7月小松の地に「テレビ小松」なるケーブルテレビ局が開局しました。全国的にも昭和63年頃から開局ラッシュが続きニューメディアの時代となって参りました。そこでこの小松にもと考えて会社を設立し免許を取得し、7月の開局となりました。

社長には中学26回卒業の塚林有明氏にお願いし、株主、役員、社員も本校卒業の多彩な面々で構成されています。

高度情報社会の到来と首都圏への一極集中から多極分散へと時代は変わりつつあります。そんな中、小松でも新しいメディアへの模索がありました。昭和63年4月株式会社テレビ小松が設立され、免許取得に向けて地道な作業が始まりました。そして2年半がかりで免許を取得し更に10ケ月の工事期間を経て平成3年7月ついに開局を迎えました。

ニュース、映画、スポーツ、音楽等の専門チャンネルや区域内や衛星放送の再送信チャンネル等を含めて20チャンネルで放送しています。スタッフがかけずり回って取材した市内のミニ情報を、また独自に制作した自主番組は今までにない新鮮さで市民に溶け込んでいます。それは全国的に見て東京一極集中であり石川県として見れば金沢一極集中であるからどうしても情報も金沢のニュースが主体として報道されます。そんな時テレビ小松のきめ細かな地域情報が市民の皆様の目には新鮮で親しみやすいと映るでしょう。

これから21世紀に向けて小松市が更に発展し繁栄して行くためには高速交通網の整備と情報通信網の拡充は急務と云えましょう。リアルタイムで情報が得られ、人的、物的な流れがスムーズになり首都圏との交流が盛んになればわが校出身者はじめ優秀な人材の外への流出を抑え更にユーターン組にとっても頼もしい郷土となるでしょう。

小松高校90年の歴史と伝統を胸に21世紀への橋渡し役を果たしたいとこれからも頑張りたいと思っています。同窓生諸君の絶大なるご協力を期待します。（高校16回）

能「橋弁慶」

小嶋　俊秀

高校を卒業して22年、その間、結婚、歯科医院の開業等いろいろあったがいよいよ初老を迎えることになった。4年程前に私の仕舞の師匠である藪先生より「小嶋さん、初老を記念して親娘で能をいかがですか。」とすすめられ、一生の思い出に能をかけることになった。それから1年娘と二人で先生の所へお稽古に通った。まだ3年生である娘はよく居眠りをしていたものだが、一生懸命がんばってくれた。いよいよ当日、今まで何度か能のシテをつとめさせていただいたが、今回はたくさんの人を招待しており、随分と気もつかったし緊張もした。いよいよ時間となった。能楽堂の客席もほぼ満席の様子である。幕が上がり橋掛りを通り舞台へ向かう。随分と橋掛りが長く感じられたが気持ちは不思議と落ちついていた。「是は西塔」で始まる謡も上々の出来だ。ツレとの問答もうまくいき気持ちがどんどんのってくる。中入で一度楽屋に退きいよいよ後半だ。娘が舞台に出てゆく。私は心配でしょうがない。姿を見ることは出来ないが娘のはりのある謡いが聞こえてくる。足の拍子もはづしていない。「良かった。」私もまた舞台へ出て行く。舞台の上では牛若と弁慶だ。丁々発止と切り合いやがて長刀を打ち落とされ、大団円。最後に娘に薄衣を着せる時は不思議と娘が頼もしく思え心の中で「有難う」と言っていた。終ってから母が嬉しくて涙が出て止まらなかったと言ってくれたのが一番嬉しかった。

「大輪の菊咲かせたり親娘能」
母の嬉しい贈りものだった。
（高校21回）

和やかな『白嶺句会』

金沢支部　吉田　耕介

いつか金沢支部の幹事会の席で、伊東支部長がお互いのコミュニケーションをはかるために「趣味の会など良いのではないだろうか」と仰しゃって、有志から俳句の会を作ってはと発言があり、幸い県女出身でホトトギス同人の小竹由岐子さんも同席されておられたので、早速ご指導をお願いしたら「指導というよりも

ご一緒にやりましょう」気安く引き受けて頂いた。

そして昭和61年4月「花見て一杯」ということで兼六園の夜桜を愛で乍ら、発会となった次第です。会名は旧中学、県女、市女そして高校それぞれの校歌に「白山」があり、たまたま初句会の場所が護国神社の白嶺会館であったので異口同音に『白嶺句会』と決まった。

それから五年、みんなとの『であい、ふれあい』を大切にし句会のあとの雑談など楽しみに笑声の絶えない同窓の集いも、なんとか節目を迎えることが出来ました。句会は毎月1回、そして行楽をかねての1泊2日の吟行も年に1、2回企画し、何しろ気兼ねのいらない人ばかりなので軽い冗談を交し乍ら「楽しい句会」をモットーとしてやって参りました。

今まで挫折することもなく続けてこられたのも、会員の努力は当然ですが、未熟なわれわれを根気よく基礎からご指導頂いた小竹由岐子さんのお蔭であることは申すまでもなく、会員一同は本当に仕合せであり誇りに思っている次第です。

同窓会は横のつながりは勿論のこと先輩後輩の綿々とつづく縦のつながりも大切で、その点趣味の会などは大変好都合かと存じます。

この5年の節目に発行した句集『白嶺』から一人一句を書き抜いて見ました。

（中学40回）

尚、金沢支部の会員でなくとも同好の同窓生なら大いに歓迎いたします。気軽く雑談をしに覗いて見て下さい。

定例会は毎月1回で、その日に翌月の日時と兼題が決まります。ご連絡頂ければ幸いです。（会費は一ケ月千円）

（連絡先）㊗三〇七七番　門口まで

吟行会　吉野にて（平3.11/10）

白嶺句会作品集

海と言ふまた寒きもの見て来たる
小竹由岐子（県女37回）

コスモスの咲く教会に時すごし
上田　邦子（高校7回）

二日はや赴任の息子みちのくへ
岡本　幾代（県女13回）

泰山木残し生家の建ち替る
大寺喜久子（県女36回）

惜しみつつおとす二人の柚子湯かな
門口　忠男（中学39回）

外国の子らは雑煮を祝ひしや
川崎　俊雄（高校2回）

あえのこと能登は静かに冬に入る
木村　郁子（県女30回）

野芹摘みいつしか遠く来てをりぬ
紺谷みち子（県女27回）

子と住みて椅子の暮らしや揚雲雀
堂谷美智枝（高校4回）

熱燗を佛の父に供へけり
西沢　輔治（高校3回）

祇王寺の吉野窓なる竹の秋
広田　謙次（中学41回）

友禅を流すそろそろ雪催ひ
村田美見子（県女38回）

頼政の墓にもかかり花の屑
横川松次郎（中学39回）

筑紫野を驚かしたる春の雪
吉田　耕介（中学40回）

本部だより

◆平成3年度小松同窓会総会が7月12日にホテルサンルート小松で開かれました。宮岡金次郎氏（高校18回）の司会で午後6時半開会、会務報告、決算報告、予算審議などあり、会員の承認を得て総会終了、引き続き懇親会に入りました。出席者は中学68名、県女12名、市女5名、高校74名、学校13名の一七二名でした。懇親会は亀田作雄氏（中学22回）の乾杯で始まり、だいたい各回ごとにテーブルを囲んでにぎやかに進み、最後に中学・県女・市女・高校と順々に舞台へ上り校歌を斉唱の後、幕を閉じました。

◆会報第2号に載せました卒業記念樹について懐かしく想い起こされた方も多かったようですが、いくつかの件が指摘されました。〝前庭の大イチョウが中学6回の記念樹だと伝え聞いている〟とのことでさがした石碑は卒業年が割れてしまっていて確認できません。〝中学38回生は記念樹が見当たらず、後にアラカシを植えなおしたぞ〟と指摘を受け、前庭に確認しました。高校10回がぬけていましたが10回の理事に調べていただいた結果〝マツで石碑もある〟とのことで一緒にさがして、昭和32年と33年度と両方の石碑の木を見つけました。結局第9回も間違いが判明、第9回はヒマラヤスギ、第10回は三葉マツに訂正します。以上記念樹が65本、更に加えて前庭の目立つ樹々約一〇〇本に木の名前と卒業回数を書いた札をつけたいと思い、目下準備中ですが春には着けたいと思っています。

◆第2号に「先輩からの手紙」で高野秀三氏のお便りを紹介させていただきましたが、氏の紹介ができませんでした。この度高野氏より「米寿記念回顧録」の立派な冊子をお送りいただきました。氏は北海道大学農業生物学科のご出身で、台湾総督府で益虫の研究に尽され、その後は帯広畜産大学教授等を歴任されました。

あとがき

本誌も3号になり、少しづつ軌道に乗った感。富山支部誕生、金沢支部の白嶺句会を披露できました。次号への飛躍を期待するや切。（M生）